

△山本周五郎の時代小説について▽

第二回卒業 太田 富美子

卒業論文を書いていたあの頃、それはもう、遠い存在でしかない。

だが、書上げるまでの様々な労苦、苦難、そしてやがては、完成へと導いた力、その事実はたとえ、過ぎ去っても、永遠に消え去ることはない。

「一つのもの」の完成、それは偉大であり、すばらしいことかぎりない。あの時、卒業論文に費した「時」と「一つの書物」は、現在も又未来も、自分自身の一つの財産として、永遠に残るものにはがいない。たとえ、一生懸命卒業論文に費していたあの一時期が、もう、うすらい、かすかなものになってしまっても、「一つのどっしりした重みのある書物」、それだけは永遠であり、一つの宝である。あれから三年、今は、「そういえば、そんな一時もあったのか」と思う時期になってしまった。

何度も通った図書館、神田の古本屋さんを一日がかりで歩いたあの頃。うすらいでいたあの頃が又甦る——。卒業論文の指導途中での「片桐先生の死去」、誠に悲しいことであり、口惜しかった。それからいろいろいるなことがあり、それでも書き上げ、最後の終止符（マル）を打った時の喜び、そして、表と裏に表紙をして閉じた時の二重の喜び、それらは深い感動と共に甦る。創作意欲に猛っていたというか、ただ、がむしやらに書いていたあの頃。ただ一途に筆は完成

へ向かって紙の上を走っていた。私の命令もずいぶん聞いてくれたものだ。今はただなつかしい。

それなのに、最近「何か書こう」という意欲を燃やしても筆が付いて来ず、「書くこと」のむずかしさをつくづく感ずるばかりである。又、山本周五郎のことば、

——私のもっとも恐れる事は、机上で仕事をする事である。が再び浮んでくる。

しかし、何と言っても「一つのもの」を完成できた、完成したという事は、学生生活の締括りとして、又、過去何年かの総まとめとして、いやそれだけではない、いろいろなもの総てからして、どんなにか、すばらしい幕切になったことだろうか。そして、人生の次の段階への出発点になったことだろうか。

私は卒業論文を思い出しにたくない。ほんの多少でもいい、いつも私のそばに活き、もっともつと学び取っていきたい。たった一人の作家ではあるがとにかくその作家を研究し、その作家からいろいろな事を学んだ。しかしまだまだ学ぶ事はたくさんあるのだから、たとえ、あの卒業論文の最後のページに終止符が打たれていても、気持の上では読点にしたいと願う。いや、読点にすべきなのだ。そうして——、終りのない、ながいながい書物にしたい。

△源氏物語の謙譲語▽

——「奉る」と「聞ゆ」について——

第二回卒業

保田 ひろみ
(旧姓 木下)

当時、特に研究したいと思うテーマも持たず国語学ゼミに籍を置